

〔書評と紹介〕

関根達人著

『モノから見たアイヌ文化史』

越田賢一郎

本書は、関根達人氏が自ら調査された物質文化をもとに、蝦夷地の縄文文化から近代の「北海道」誕生までを、「蝦夷地史」としてまとめたものである。氏は、博士論文を『中近世の蝦夷地と北方交易―アイヌ文化と内国化―』（吉川弘文館二〇一四年）として出版されており、本書はその普及版と補遺を兼ねたものといえることができる。

氏は、アイヌ文化の形成について、列島規模で展開し始めた中世的日本海運の北上により対和人交易が飛躍的に拡大するいっぽう、北方に対しては、サハリン島への進出にともないアムール女真文化との文化的接触を受け、擦文文化が「化学変化」して生成したとしている。

本書は、このアイヌ文化が展開した蝦夷地が本州の政治的支配に組み込まれていく過程を、モノから描きだすことを目標としている。アイヌと和人との社会的・経済的關係について検討を行い、経済活動に伴う人と日本製品の蝦夷地進出がアイヌ民族の自立性を奪い、政治的な内国化に先立ち、蝦夷地が日本国内経済圏に組み込まれていく過程を明らかにした。

その論考の過程を示す、本書の構成は次の通りである。

プロローグ アイヌ文化とは何か？

第I章 日本史とアイヌ史

1 北方史の中のアイヌ

2 アイヌ史の登場

3 見えてきた本州アイヌの実像

第II章 アイヌ文化の形成

1 アイヌ文化の成立時期とその歴史的背景

2 初期アイヌ文化に見られる大陸的要素

3 アイヌ文化の特色

第III章 アイヌ文化を特徴づけるモノ

1 アイヌ文化にあつて和人社会にないモノ

2 アイヌの人々が大好きなモノ

3 本来とは違う使い方をされたモノ

第IV章 アイヌ文化の変容

1 コシヤマインの戦いとそれ以後

2 シヤクシヤインの戦いとそれ以後

3 クナシリ・メナシの戦いとそれ以後

エピローグ 民族共生への道

第I章では、これまでの蝦夷地の歴史研究、アイヌ史研究の視点が整理されるところに、今後の研究の方向性が述べられている。

「1 北方史の中のアイヌ」では、日本列島の地域的多様性に対する関心が高まり始めた一九九〇年代から進められてきた「北方史」研究についてふれている。「北方史」は日本史の一分野として定着し、さらに

日本史の枠を越え、北東アジア世界史の枠組みへと広がっていった。アイヌ民族を北東アジアの中で中国、日本の辺境地域に位置するだけでなく、北太平洋の民族世界とをつなぐものとして位置付けている。

「北方史」のなかから、アイヌの人々を主役として描く「アイヌ史」の構築が行われ、「交易民」としてのアイヌ像が強調された。氏は、これらの研究には、「北から」の文化的影響を重視するあまり、「南から」すなわち本州から北方世界に向かった和人や日本製品にはさほど関心が示されてこなかったこと、アイヌと和人ととの関連性が軽視されている点を指摘した。そして、「蝦夷地の歴史は、アイヌをはじめとする北方民族と北方へ進出した和人の双方によって営まれた歴史であり、さらには中国やロシアとの関連性の中で形成された歴史である。蝦夷地がどのような経緯で民族の土地から日本国へ編入されるに到ったのか、内国化の歴史を、考古資料・文献史料・絵画資料・民具・民族調査などにより多角的に検証する必要がある」（P113）と、研究の方向性をまとめた。

「2 アイヌ史の登場」では、アイヌ民族の歴史を描く時の史料の制約について述べる。明治までは、アイヌの人々による文字記録がなく、これを補うものとして、和人による文字記録・絵画資料があるが、ほとんどが一八世紀以降のものである。またアイヌ自身の口承伝承、伝世した民具などがあるが、更に新しい時期のことを明らかにしうるのみで、一七世紀以前の歴史を描くには、考古学的調査により出土したモノに頼らざるを得ないことを指摘する。

モノから時間を決めるメルクマールとして、火山灰による編年と、陶磁器や鉄鍋、銚先、キセルなどによる編年が組み合わされて行われてき

た。だが、北海道では中世・近世に並行する時期の考古学的研究はアイヌの人々を対象にした「アイヌ考古学」が主体であり、本州における中世・近世考古学とはあまり接点を持つことなく進められてきたことを指摘した。そして蝦夷地史を描くためには、アイヌ考古学と中近世考古学を融合する研究が不可欠であるとしている。

「3 見えてきた本州アイヌの実像」は、これまで北海道側からはほとんど論じられることのなかった部分である。氏は、骨角器、ガラス玉、蝦夷拵太刀の刀装具などの遺物を北海道からの出土品と対比しながら、本州アイヌの遺跡と認定した。また、『弘前藩庁日記（国日記）』や盛岡藩の『雑書』などの文献にみられる「狄」についての研究を紹介している。東北北部のアイヌの人々の生活と同化の過程を明らかにすることは、蝦夷地のアイヌの人々の変化をたどる上でも参考になる。

第II章では、アイヌ文化の形成に至る経緯が述べられている。

「1 アイヌ文化の成立時期とその歴史的背景」では、擦文文化からアイヌ文化成立への動きが語られる。擦文文化の終末は道南・道央では一二世紀、道北・道東では一三世紀であり、土器に変わる煮沸具としての鉄鍋に移り変わり、住居形態が壁際にカマドを設けた竪穴住居から、中央部に囲炉裏を設けた平地式住居に変化する。

墓は、擦文中・後期は道東では住居内埋葬（廃屋墓）、道央部では土坑墓が主流で、伸展葬で葬られており、この伸展葬の葬法はアイヌ文化へと引き継がれる。副葬品の面では、一三世紀以降のアイヌ墓から刀子、漆器など豊富な副葬品が出土するようになる。これは本州の墓が六道銭

以外の副葬品をほとんど持たないのと比べ特徴的である。

このような遺構の変化に加え、アイヌ文化を特徴づける遺物として、鉄鍋、漆器、ガラス玉、蝦夷刀、骨角製狩猟・漁撈具があり、これらの品々が揃うのは一三〇―一四世紀としている。

アイヌ文化を成立させる背景として、古代末から中世前期に北海道と本州を結ぶ北方交易が中世的流通システムに組み入れられ、交易量がそれまでとは桁違いの量に拡大したことをあげている。この時期を代表する遺跡が北海道の余市と青森県津軽半島の十三湊であり、本州から蝦夷地に流入したモノの様相を知ることができる。

「2 初期アイヌ文化にみられる大陸的要素」では、アイヌ文化の成立には、北方のサハリン・沿海州との文化的接触が大きく関連していると説く。「方形配石茶毘墓」と呼称した余市町大川遺跡と伊達市オヤコツ遺跡の墓は、渤海の石室墓やアムール女真のバフロフカ文化の影響があると述べている。また、「金属板象嵌技法」とする木製の器具の表面に銀板や銅板をはめ込んだ装飾をもつもの、針金（ワイヤー）状の鉄線を素材とした、腕輪、チェーン状のネックレス、垂飾（「コイル状鉄製品」）などの「針金で作ったアクセサリー」をくわえており、いずれも一五世紀以前としている。

「3 アイヌ文化の特色」では、魂送りの思想をとりあげている。魂送りの基本的思想は、「アイヌの人々は、自然現象から動物・植物・器物に到るまで、森羅万象にカムイ（霊的存在）を認める世界観を持つ。カムイは、神々の世界であるカムイ・モシリでは人間と同じ姿をしており、人間の世界であるアイヌ・モシリを訪れるさいには、その使命

に応じた姿をすると考えられている。アイヌの人々にとってカムイは人間と対等な存在であり、両者が互いに支えあうことで世界が成り立っているとされる。アイヌの人々は、自分たちのもとへ遣わされたカムイに感謝してカムイノミと呼ばれる送りの儀式を行う。カムイ・モシリの世界へと還されたカムイはふたたびアイヌの人々のもとへと遣わされるのである」（P七一・七二）と要約し、もの送り儀礼は、アイヌ文化の概念を規定するうえで非常に重要な宗教的要素としている。

アイヌの人々は、交易を通して和人から多くの物資を得ていたが、すべてを受け入れたわけではなかったことを指摘する。たとえば玉・鏡・刀剣のように古代日本社会のなかで支配者の権威を表象する宝物を好み、古い時代の漆器を重視していた。逆に、陶磁器、喫茶の風習、仏教の習慣は受け入れず、銭貨も装飾品に転用することはあっても貨幣として用いることはなかった。

第三章では、アイヌ文化を特徴づけるものが三区分して論じられている。

「1 アイヌ文化にあつて和人社会にないモノ」では、ガラス玉を使用したネックレスや金属製のピアス、海獣類を捕獲するときに使用する、鯨骨やシカ角で作られたキテと呼ばれる鉾頭、毒矢、丸木弓の短弓があげられている。

「2 アイヌの人々が大好きなモノ」では、刀、銀製品、刀装具、嗜好品のたばこと喫煙具があげられている。特に刀は単なる武器ではなく威信財であり、交換財や担保・賠償にもなりうる宝物であった。蝦夷拵

え刀は一三世紀に出現し、一四世紀代までは武器として使用されたが、一六世紀以降儀礼用の「切れない刀」へと変化する。

「3 本来とは違う使い方をされたモノ」では、一〇・一一世紀の「佐波理」鏡の破片での流通、中世前期の刀装具の「七つ金」、「足金物」の装身具への転用、兜の「鍬形」の「ペラシトミカムイ」への変化、鏡のシトキへの再利用、孔あき銭の首飾りとしての使用、米国製金ボタンのシトキへの転用など、本来とは違う使い方をされた例をあげている。

IV章では、アイヌと和人の三つの戦いを指標として、アイヌ文化の変容についてふれている。

「1 コシヤマインの戦いとそれ以後」では、事件が起きた一四五七年前後の矢不來館、古銭、板碑、マキリ、当時の鍛冶技術などについてふれている。中世前半に十三湊を拠点として北方への海上の道を開いた安東（安藤）氏は、南部氏との戦いに敗れ、一五世紀半ばには蝦夷地へと敗走する。これ以降、蝦夷地ではセタナイ・上ノ国・松前が北方交易の要となっていた。コシヤマインの戦い以降、和人とアイヌ集団の争いが続き、上ノ国勝山館によつた蠣崎氏が和人勢力の頂点に立った。

なお、この時期の道南部のアイヌの様子が、勝山館跡から出土したイクパスイ、シロシの存在、墓などからわかり、一部では和人との共生関係が考えられている。

「2 シャクシャインの戦いとそれ以後」では、日高地方を中心に一六六九年に起きたシャクシャインの戦いの時期に、エゾシカの骨がまともって見つかる遺跡があり、国家がエゾシカの毛皮を求め始めた時期と

重なることが指摘されている。シャクシャインの本拠地であったシベチヤリチャシ跡の出土品には、一六世紀前半の伊万里焼や多くの鉄製品があり、盛んに交易が行われていたことがわかる。

「3 クナシリ・メナシの戦いとそれ以後」では、石造物が語る和人の北方進出の様子がまとめられている。和人が建てた石造物は、墓標にせよ奉納物にせよ和人が抱いていた宗教的観念の発露であり、和人の蝦夷地への経済的・政治的・宗教的進出をたどることができる。

また、松前の石碑の中には一八五六年に建てられたと推測されるカラフトアイヌ供養・顕彰碑もあり、カラフトアイヌと幕府との関連をうかがえる資料となっている。

このほか、余市の入舟遺跡で、一九世紀後半のニシン釜を据える石組炉の下から出土した、「羽州 大山 石寺屋」と刻印された酒樽の底板についてもふれている。石寺屋は現在の山形県鶴岡市大山地区の酒屋で、一八世紀後半から幕末まで営業していたことが知られている。この地区の酒は松前・函館・新潟に移出されており、蝦夷地の和人の需要やオムシャの際にアイヌに供せられたと考えられる。

エピローグでは、蝦夷地の歴史を、日本史やアイヌ史のようにどちらか一方の立場からではなく、よりニュートラルな視点から描く「蝦夷地史」の提案がなされている。「内国化」の過程を明らかにすることが、現在日本政府が進めようとしている「民族共生」に向けた第一歩であり、経済的・政治的関係から文化的関係へ転換する必要性が述べられている。関根が述べる、「アイヌの物質文化研究を通し感じられるのは、「モ

「ノ」は単なる物ではなく、モノには魂が宿っているという一貫した思想である。彼らの頭の中では、生物の生や死と同じように、人が作り出すモノの生産と消費が認識されていたに違いない。そう考えると、アイヌの人々が交易に便利なはずの貨幣をなぜ受け入れなかったのか理解できる。彼等にとっては、お金で命が買えないのと同じ理屈で、お金ではモノは買えないのである（P 一七四）の言葉が印象的である。

なお、この書を理解するために、氏は多くの調査記録をまとめておられるので（関根他二〇〇九、関根編二〇一二 a・b など）、『中近世の蝦夷地と北方交易』と併せて読まれることをお勧めする。

* * * * *

以上のように、関根氏は、アイヌ文化を代表する物質文化として鉄鍋、漆器、ガラス玉、蝦夷刀、骨角製狩猟・漁撈具をあげ、その成立時期を一三〜一四世紀にしている。これに、陶磁器や石造物など和人の残した物質文化をくわえて、和人の経済的進出とアイヌの人々の関連をとらえ、近代の政治的統合までの過程を明らかにしていった。氏の語るアイヌ考古学と中近世考古学との接点を作る作業といえよう。その中でも特筆できるのが、これまで北海道考古学でほとんど扱ってこなかった一八・一九世紀の陶磁器や石碑に目を向けたことである。また、本州アイヌについて触れたことも一つの新しい方向性と思われる。

かつて藤本強氏は、日本の文化を、稲作農耕を生活の基盤にした「中の文化」、北海道を中心とした「北の文化」、沖縄県と南島にみられる「南の文化」に分けて、北海道渡島半島から東北地方北部と九州地方南部を「ぼかし」の地帯として設定した（藤本強一九八八・二〇〇九）。

この本が出版された当時はまだ日本文化の均質性が強調されており、藤本氏の主張はその情勢下で「北の文化」と「南の文化」の独自性を描き出したものであった。関根氏が述べる「北方史」の視点の中で成立した本ではないかと考えている。なお、「ぼかし」の表現に対する反論もあるが、ここではこの用語をそのまま使わせていただく。

これまで、「ぼかし」の地帯の立場から「中の文化」を記述する研究者は多かつたが、「北の文化」は、「ぼかし」の地帯の特殊性を述べるために使われることが多く、「北の文化」の歴史を丹念に描く人は少なかった。関根氏の中に藤本氏の概念に対する意識がどの程度あったかは分からないが、本書は、「中の文化」からでもなく、「北の文化」からだけでもなく描かれた、二つの文化の境界を意識した、「ぼかし」の地域の視点から書かれた「北の文化の歴史」書といえるのではないだろうか。

東北北部の「ぼかし」の地帯の文化（蝦夷文化）が「中の文化」に取り込まれるようにして消え、その次の段階で「北の文化」が「中の文化」と直接接する中で、蝦夷地の中に新たな「ぼかし」の地帯が形成される。その「ぼかし」の地帯を通して、「北の文化」がどのようにして「中の文化」に組み入れるようになったのかの経過が描かれているといえよう。

この姿勢から生み出されたのが、民族共生への提言となる。あとがきには、「文化の多様性は何物にも代えがたい人類の財産である。アイヌ文化に対する理解を深めることは、アイヌの人々だけでなく、日本人全体に知的・精神的刺激を与え、新たな文化の創造に寄与するに違いない」（P 一七五）と述べられている。

最後に、少しだけ私見を述べさせていただくと、本書はニュートラルな、第三者的な目で北海道史を見ている、つまり先に述べたように、「ぼかし」の地帯からみた「北の文化」の歴史とみることが出来る。そのため、きれいな形でまとめられているが、アイヌ文化そのものへの追及が表面的なものに終わっている感を持ってしまう。

通史という、また普及書という意味で、またモノ（遺物）から描く歴史という視点からではいたしかたないかもしれないが、出土遺物と出土遺構との関連、集落の様相、遺跡の内容までの記述など、そこに生きているアイヌの人々に迫るものに欠ける気がする。また、Ⅲ章などこれまで「アイヌ考古学」に携わってきた人々の成果を活用したうえでこの著作であることを、研究史のような形でもう少しふれていただきたかった。

この著作は、関根氏の「蝦夷地史」研究の出发点に位置づけられるものであり、今後、一つ一つの遺跡を分析し、出土したモノを更に検討していく中で、より具体的に深化させていくことができると考える。

もうひとつが、「蝦夷地史」から「北海道島史」へ進んでもらいたいという提言である。「蝦夷地」が政治的に統合されて「北海道」になった近代以降を、考古学の目からも描きあげていただきたい。その時代にこそアイヌ文化への圧迫が行われるからである。

近代になっても考古学の対象とするものは多い。産業考古学の視点、戦史考古学などすでに取り上げられている分野ばかりでない。関根氏の研究されている石造物の面でも、アイヌの人々を顕彰した石碑もできるようになり、それが開拓者の石碑と織り成す関連も記録されていかなければならないであろう。特にモノを扱うと云うことになれば実に多くの

文化財が残されている。「北海道島」において、アイヌ文化と本州の文化が、それに北方からのロシアの影響、外国人教師が建築した西洋的産業・文化の影響などが明治以降の歴史へと続いていく。

アイヌ文化の圧迫の歴史をきちんと明らかにすること、その上で共生空間としての進むべき道を、「北方史」、「アイヌ考古学」を進めてきた人々と共に、これからも是非考えていただきたい。

関根達人・佐藤雄生 二〇〇九「出土近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化」『日本考古学』第28号、六九―八七

関根達人編 二〇一二a 『松前の墓石からみた近世日本』北海道出版企画センター

関根達人編 二〇一二b 『北海道渡島半島における戦国城館跡の研究』弘前大学人文学部文化財論研究室

関根達人・佐藤里穂 二〇一五「蝦夷刀の成立と変遷」『日本考古学』第39号、九一―一一一

藤本 強 一九八八『もう二つの日本文化 北海道と南島の文化』東京大学出版会

藤本 強 二〇〇九『日本列島三つの文化 北の文化・中の文化・南の文化』同成社

(A5判、一九四頁、二〇一六年六月二十日発行、吉川弘文館、一九〇〇円＋税)

(こしだ・けんいちろう 公財北海道埋蔵文化財センター理事長)